

初等教育における観光教育のススメ

——社会科の実践から観光教育の魅力に迫る——

内川 健*

1. 観光教育の魅力

筆者は、観光をテーマにした小学校社会科の実践に取り組んでいます。特に、子どもたちが観光を通して社会事象を分析する学習の可能性や、初等教育段階における観光教育（観光学習）の意義や価値についての研究を行っています。この観光教育の魅力について、筆者なりに考えている点が3つあります。

- ①観光というテーマは子どもたちの関心が高く、観光の視点を取り入れると、社会科の授業がより活性化する。
- ②地域の魅力と課題を総合的に理解していく学習ができ、地域の空間的な変容と歴史的な変容を観光という視点で分析する学習が行える。
- ③観光に起因する（あるいは観光から派生する）社会問題や利害関係、価値対立する諸問題は、子どもたちの選択・判断する力を養う機会になり、地域や社会の見方・考え方を育むことにもつながる。

近年、観光庁は、観光立国の実現を目指し、次代を担う子どもたちが観光の意義や持続可能な社会について学び合う観光教育の普及に取り組んでいます。2021年3月に、観光庁が主催した『観光教育フォーラム2020』が開催され、観光関係

者・教育関係者が参加し、観光教育の可能性について意見交換する機会がありました。筆者はこのフォーラム内にて、観光教育の実践報告を行いました。そこで、このコラムではフォーラムで発表した、コロナ禍でも実践することができる観光学習の実践事例について、以下に紹介していきます。

2. 地域の特産品を追究する学習のススメ

図1は、子どもたちが東京駅で発売してみたい駅弁として考案したイラストです。4年生の社会科の実践で東京都を訪れる観光客のために、東京都の魅力が詰まった『駅弁』を構想する学習を行いました。東京都の観光資源を追究しながらその魅力を詰め込んだ駅弁を構想することで、観光地として見た東京都の魅力（特産品、地理条件、観光名所など）を発見していく学習です。

授業では、東京都の特色を取り入れた駅弁の容器のデザインや包み紙、ご飯やおかずを考案していきます。その際、観光パンフレットや図書資料、聞き取り調査などを行いながら、『東京らしさといえど』『東京の名物（本時では江戸東京野菜）』といった観点からグループごとに東京都の食文化や伝統工芸、特産品を調べ、調べた素材・材料を取捨選択しながら駅弁を構想していきました。

子どもたちが考案した駅弁は、開発構想発表会を開いて保護者に向けてグループごとにプレゼンテーションを行い、駅弁の実現性や妥当性を評価

* 成蹊小学校／成蹊学園サステナビリティ教育研究センター

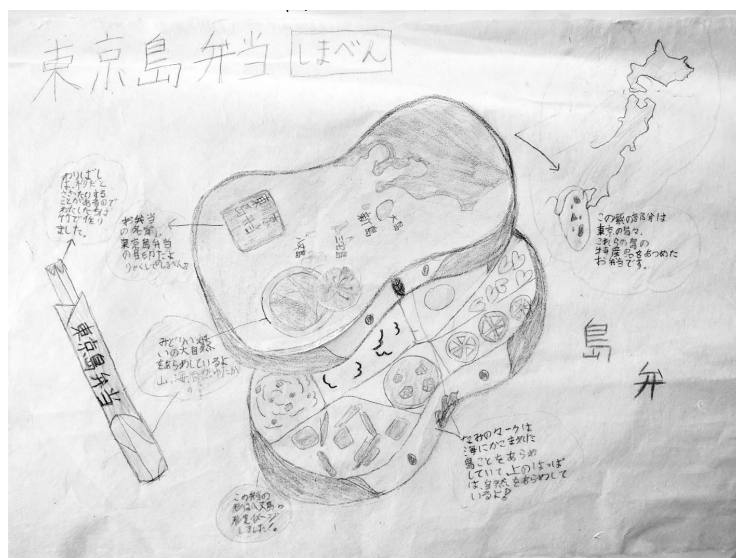
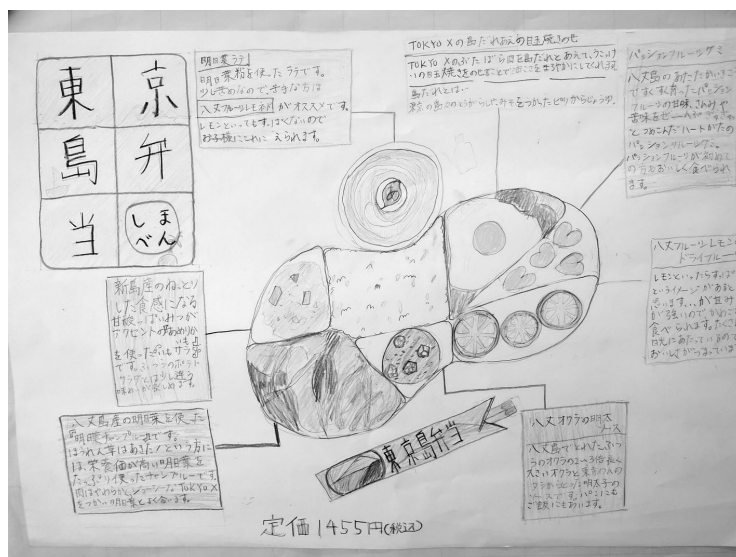


図1 考案した駅弁のイラスト

してもらった機会としました(図2)。この学習は結果的に、①地元には有名な史跡名所・観光名所がなくても、食材や地場産業などの魅力がどこの地域にもあること、②内容理解になりがちな学習が、地域の現状や歴史、あるいは生産者を通じた人のいる風景を感じながら学習が展開できること、③観光が地域の産業や歴史、食文化などを包括する

ために、地域の特徴や課題を総合的に理解していく学習につながる事が明らかとなりました。さらには、『東京都といえば』といった観点から観光資源やまちの魅力を探すことで、そこから見出した観光資源を価値化したり今ある観光資源を再評価したりする実践になりました。



図2 プレゼンテーションの様子



図3 調べ学習の様子

3. 持続可能な社会の形成者を育成する観光学習のススメ

次に、観光を切り口に、社会に内在する環境問題を取り上げ、その解決策、つまり持続可能な社会の実現に向けて、対話的・協同的に議論することを企図した学習を紹介します。単元は5年生「私たちの生活と環境」に該当します。

観光は、地域経済の起爆剤としても欠かせない一方で、観光問題は今の社会が抱える様々な問題に直結していることが多いです。行き過ぎた観光振興は、観光地に住む人々の生活環境や、景観そのものを破壊してしまうことが危惧されています。いわゆる観光公害です。近年、日本の観光地で大きな社会問題となっているため、そこに着目しました。そこで単元では、観光公害の問題が報告されている世界遺産登録地域を事例として、その実態と原因、さらには社会的・経済的・環境的

な側面からの影響について調べ、その上で持続可能な社会や、地域の発展を目指した施策の妥当性について価値判断をする学習を行いました。

まず、経済活動としての観光産業の重要性について学びました。インバウンドの現状と、外国人観光客の観光動向を把握し、日本の観光についての関心をもたせました。その上で、外国人観光客が増えたことにより、国内の観光地で観光公害が生じていることを学習しました。さらに、外国人観光客の急増は国や自治体にとってどのようなメリットがあるのかについて考え合いました。子どもたちからは、観光客がたくさん来ることで飲食店や宿泊施設などに経済効果を得ることができる、観光関連の仕事が増えて住民の働く場所が増える、といった意見が出てきました。これらの意見は、地域の社会・経済の側面からみて『観光振興はプラスの効果がある』という子どもなりの解釈であったと思います。

そしてこの後、世界文化遺産である「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の観光の現状を、子どもたちなりに評価する学習につなげました。新聞記事や統計資料から、白川郷は世界文化遺産に登録された後に観光客の大幅な増加があったこと、観光に関わる商業施設もそれに伴い増加したということ把握し、その上で、世界遺産に登録されることのメリットとデメリットについて考え合いま

した。子どもたちからはメリットとして、知名度が高くなること、郷土を自慢できる、観光客が多く来ることによって経済効果がある、といった意見が出されました。一方、デメリットとして、伝統的な街並み景観の維持に苦勞すること、観光客のマナーの悪さによって生活環境が悪化すること、商業主義的な面が強まることで景観破壊が進み街並みを維持・存続できなくなるのではないかと、といった意見が出ました。子どもたちは、住民と観光客の考えの相違や対立した概念をもとにしながら双方の立場に身を置くことで、観光を推進するべきか、住環境を保全するべきかなど、様々なジレンマを抱えるようになりました。

続いて、前時までの学習を生かし、京都市内で生じている観光公害の状況を事例として、観光が地域に与える影響について資料をもとに考えていきました。新聞記事やインターネットを使ったり、子どもによっては京都市内に住む親せきや知り合いから情報を収集したりしていきました。京都市内は観光客の増加に伴い様々な問題が生じていることをつかみます。例えば、外国人観光客の増加によって路線バスの乗車に関するトラブルが発生していること、食べ歩きのマナー違反があることなど、観光客が集中することで住民の生活環境が脅かされている事実を知りました。

そして、観光公害対策として京都市が実施して



図4 京都のバス停の様子
(2019年1月筆者撮影)

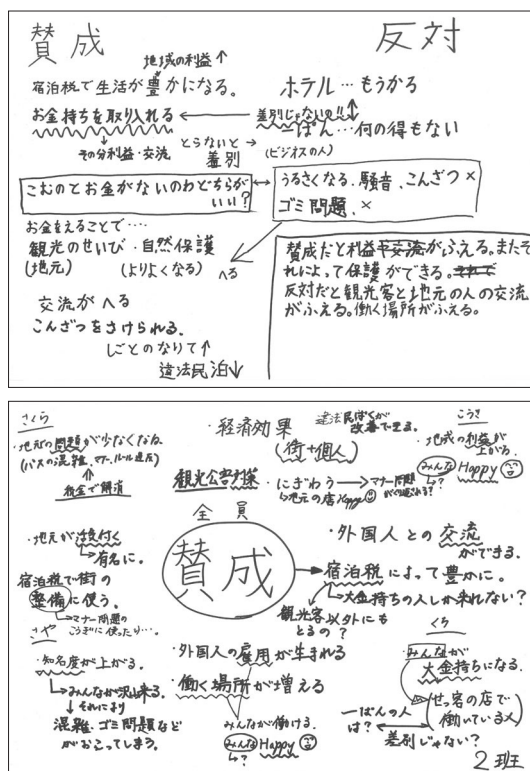


図5 京都市の観光公害対策への意見

いる宿泊税の是非について資料をもとに価値判断をする授業を行いました。新聞記事を参考にし、宿泊税導入のメリットとデメリットについて考察させた結果、多くの子どもたちは宿泊税の導入に賛成意見を述べました。それは、観光におけるメリットを享受するためには、住民や観光客も関係なく、誰もがお金を負担し合うことが必要であるとする考えでした。また、宿泊税を徴収することは観光公害への対策のみならず、結果的には魅力あるまちづくりにつながっていくという意見もありました。一方、反対派は少数でしたが、観光客以外の市民にも金銭的な負担を求めてしまう点を懸念すること、宿泊税を徴収することが必ずしも観光公害を防ぐことにつながらない、マナーの啓発に努めた方が良いとする考えがありました。

続いて、観光公害の対策案を提案することを目

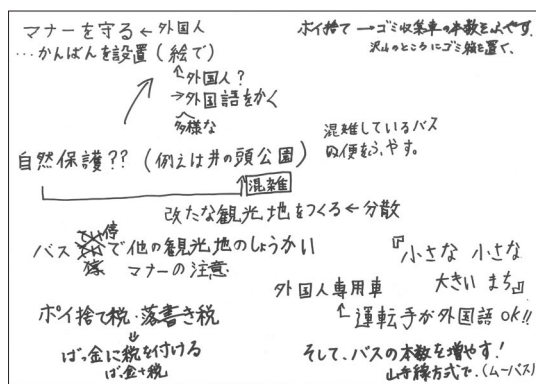


図6 武蔵野市の観光公害対策への意見

指して、グループで宿泊税の導入の是非をテーマにした話し合いを行いました（ここではワールドカフェ方式を採用して考えました）。子どもたちが意見交換をしてまとめた左図のように、現在の観光施策の検証、そして他の施策の提案も含めた様々な意見を加味しながら、批判的な思考のもとづき、さらにより良い解決策を子どもなりに出し合おうとする思考のプロセスを学習の成果として確認することができました。

こうした国内の社会問題である観光公害がもたらす影響の事実を踏まえて、今度は身近な地域（学校のある武蔵野市）の観光の現状について調べていく学習を行いました。コロナ禍であると、身近な地域の観光について調査していくのは難しいですが、身近な地域が将来的に持続可能な観光地でいられるように、現在の取り組みと今後の施策について再評価・再検討していく学習となりました。総じて、観光客が困っていることは、むしろその地域に不足している部分である、と捉えると、まちづくりの観点からも、観光を窓口にもちの状況を学習することの意義は大きいといえるでしょう。

4. 社会科の楽しい学びをつくるために

観光は、子どもたちの関心の高いテーマです。全国どこにでもあるテーマですので、特定地域の

問題で終始するのではなく、学んだことを自分の地域に範化できる学習につながります。もちろん、客観的な資料をもとに考えているとはいえ、子どもたちの提案や解決策の妥当性については、観光関係者や専門家の吟味、あるいは意見が必要ではありますが、子ども目線での捉え方や子どもらしいアイデアは非常に斬新かつ新鮮なものもあります。そうした学習の中で子どもたちからは、訪れる観光客のために、あるいは自分が住むまちのために何かをしたいという情熱を感じました。これはホスピタリティの精神にも通じると考えられます。

社会科の授業で取り組んできましたが、ESDやSDGsの授業をどのように組み立てていったら良いのかが分からない、といった悩みがあった時には、観光学習は『まちづくり』という観点からも有効な学習テーマにつながると思います。統計資料や話題も含め、学習内容が難しく感じられるかもしれませんが、観光の学習は子どもたちの興味・関心が高く学習課題に切実感をもたせやすく、さらには子どもが解決したくなる話題、追究していきたいと思える場面をたくさん作ることができます。そして、何よりも楽しい学習になります。今後、全国の小学校で、観光をテーマにした学びの実践が数多く世に出てくることを楽しみにしています。

〔付記〕本稿は、成蹊学園サステナビリティ教育研究センターリレーコラム(22)(2021年6月4日web掲載)の記事を本誌に再録したものです。

文献

- 内川健(2019)：小学校社会科における地域の魅力と課題を題材とした観光学習の授業開発。『新地理』63(7)：pp.83-85.
- 内川健・佐藤克士(2019)：持続可能な社会の形成者育成をめざす社会科観光学習——イギリス地理教育「単元事例案」を手がかりにして——。『サステナビリティ教育研究』(1)：pp.13-25.